

日本の大学生における死と死後の不安

得丸 定子, 小林輝紀*, 平 和章, 松岡 律**

(上越教育大学学校教育学部, *長野市立湯谷小学校, **兵庫教育大学連合大学院)

原稿受付平成 17 年 9 月 30 日; 原稿受理平成 18 年 5 月 6 日

Survey on Fear of Death and After Death of the Japanese Students

Sadako TOKUMARU, Teruki KOBAYASHI,* Kazuaki HIRA and Tadashi MATSUOKA**

*Faculty of School Education, Joetsu University of Education, Joetsu Niigata 943-8512***Yuya Elementary School, Nagano 380-0802****Joint Graduate School in the Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education, Kato-gum, Hyogo 673-1494*

To gain the basic knowledge of "life and death education," the Japanese students' consciousness of the fear of death and after death was studied by a questionnaire survey. The responses were processed by the multidimensional fear of death scale (MFODS). The survey results showed: 1. Five factors about fear or anxiety of death and after death were distilled by the factor analysis. The results were different from those of a similar survey in the United States. The difference indicates the importance of a consideration for local religious and customs in developing the life and death education. 2. About 60% of the respondents stated that they had no religious faith, but it is to be noted that the average Japanese often show some religious behaviors whether or not they claim to be non-religious. Such being the case, it is important to induce this fact into the life and death education. 3. Of the gender difference regarding the fear or anxiety of death and after death, the female respondents showed higher results with all factors. 4. Those with lower level of religious faith produced lower factors of the fear of death and after death as well as the anxiety of their body after death while the factors of the fear of death body was higher. 5. It is considered that the five factors of the fear or anxiety of death and after death indicates what the contents of the life and death education should be. Therefore, much is expected of further studies on the five factors.

(Received September 30, 2005; Accepted in revised form May 6, 2006)

Keywords: multidimensional fear of death scale 死の不安に関する多次元的尺度, death anxiety 死の不安, life and death education いのち教育, school education 学校教育, adolescence 青年期.

1. 緒 言

これまでのわが国の一般市民レベルでの生と死、いのちに関する人生哲学やスピリチュアルな教育は、家庭や地域社会、学校等あらゆる場所、機会を通じて、日常生活の中で無意図的に行われてきた¹⁾。しかし、近年のわが国では、若い世代で無宗教を自称する人が増加²⁾していることや、多くの教育現場教員は教育基本法第9条の第2項「国及び地方公共団体が設置する学校は、特定の宗教のための宗教教育その他宗教的活動をしてはならない」については、触らぬ神にたたりなしと比喻されるように宗教に関する内容を避ける傾向があること、また、第2次世界大戦下での国家神道

による国民支配についての反省と「オウム真理教」に代表される危険カルトに対する警戒等から、公教育現場では宗教に対して君子危うきに近寄らず的な発想が多く、宗教的知識教育さえも行われなくなっている現状である。反面、個人の精神世界についてはスピリチュアルな生き方に関心が寄せられつつある^{3)~8)}。

現在は、病院死の増加、核家族化、医療の発達等により、「2人称の死」といわれる身近で大切な人の死が日常生活から切り離され、実体験としての死別経験が激減している。逆に自分と関係性の薄い「第3人称の死」、たとえば、ニュースで放映される死の情報やテレビドラマやゲームの中の虚構の死等は、無差別的

で大量に発信され、体験されている。このようなアンバランスな生と死に関する情報・教育が存在する現在、個人の精神世界のあり方や家庭や学校での宗教的教育(宗教教育ではない)、子どもへの人格・価値観教育が模索されている。充実した幸福な人生への考察や探求のためには、「生」と表裏一体であり不即不離である「死」や死に関する様々な考察や探求、教育は重要である。しかし、わが国の教育では、「生」の側面からの人生へのアプローチは歓迎されているが、逆の死からのアプローチは、特に20世紀後半から死や死にいくことに対する不安や恐れ、タブー、情報・体験不足等により、敬遠されている現状である。これらの現状に対して「デス・エデュケーション」「死の教育」「生と死の教育」「いのち教育」(以下「いのち教育」と総称する)の必要性が提唱され実践されつつある^{9)~17)}。

「いのち教育」は家庭、社会、学校等でのすべての教育の根底に位置づけられるものであるが、学校教育では特に家庭科をはじめ、道徳、社会、国語、保健体育、芸術等、人の生き方に関連する教育や教科において、生と死の両面を含む「いのち教育」の視点は重要な意味と価値が存在する。しかし、現時点ではそれらの教育・研究は欧米での実践や研究の翻訳的な内容が多く、日本人の心情や地域性までも考慮した「いのち教育」に関する基礎的データの蓄積や授業実践の取り組みはまだ少ない¹⁾¹⁸⁾。また、「死と死後の不安」について、特に若者の意識を扱う調査は前例がない。

死については、様々な不快な感情が強く伴うことは、あらゆる世代に共通する。特に、死をあまり身近に感じていないと思われる若い世代を対象に「いのち教育」を展開する際、授業者は彼らの「死と死後の不安」の感情に配慮して授業を進めることが要望される。つまり、授業を受ける側の宗教の有無、最近の死別経験の有無、自殺者の遺族の有無、家族構成、男女による感情や受け止め方の差はあるのか等の事前の理解が必要である。しかし、それらのことは授業者の経験に任せられ、学校教育に論及、関連したデータはわが国には見受けられない。そこで本研究では、大学生を対象に「死と死後の不安に関する調査」を実施し、それらを分析することにより、学校教育で「いのち教育」を展開する際に配慮されるべきファクターを探ることを目的とする。

2. 研究方法

(1) 調査対象

調査対象は教員養成関連学部所属の学部学生1年から4年生まで計465人(新潟県内1大学、千葉県内1大学、愛知県内1大学)。有効回答率は95.3%であった。なお、先行研究でアメリカの中西部の学部学生375人を対象に類似した調査が行われている¹⁹⁾。その調査結果を参考にするため、また、将来子どもの教育に関係する職業に就くと考えられる学生についてのデータを収集するために対象を絞った。

(2) 調査期間

調査期間は2003年10月~同年11月であった。

(3) 調査方法

新潟県内の大学(以下A大と略す)は検査会場で無記名自記式で行い、千葉県内の大学(以下B大と略す)と愛知県内の大学(以下C大と略す)には調査用紙を郵送し委託留置とした。

(4) 調査内容

調査内容は「死と死後の不安に関するもの」42項目(5段階評定)、「宗教心に関するもの」12項目(5段階評定)、「属性」2項目(2段階評定)、「入院経験の有無」1項目(2段階評定)、「身近な人の死の立会い経験」1項目(2段階評定)、「信仰している宗教に関するもの」1項目(複数回答)の全58項目で構成した。

「死と死後の不安」と一括された言葉であっても、その中に含まれている内容には、自分の死か親しい人の死か、肉体的な不安か精神的な不安か等、様々なテーマが含まれ「死と死後の不安」の概念は多面的である。ゆえに、その多面性をよりの確に捉えるために、1979年ホエルター(Hoelter, J. W.)によって提唱された「死の不安に関する多次元的尺度(Multi-dimensional Fear of Death Scale: MFODS)」¹⁹⁾をもとに、語句の表現を一部改変し、属性と宗教に関する項目を追加して調査項目を作成した。

ホエルターはアメリカの学部学生376人を対象にMFODSを用いた調査を行い、以下に示す8つのサブスケールを抽出した。①死んでいく過程に対する不安、②死体に対して抱く不安、③肉体が傷つけられることへの不安、④身近な人の死に関する不安、⑤未知なるものに対する不安、⑥死後も意識が存続しているかもしれないという不安、⑦死後に生じる肉体の変化に対する不安、⑧人生を未完のまま終えることへの不安である。その後発表されたウォーキー

日本の大学生における死と死後の不安

(Walkey, F. H.) の研究²⁰⁾でもほぼ同様な8つのカテゴリが検出されている。そのため「MFODSは質問項目の多さとリブスケールの作成によって、死の不安の多面性をこれまで以上に明らかにすることに成功したと言える尺度である²¹⁾と評価されているが、死については文化や地域によりかなり差異が生じると考えられる。ゆえに、本調査ではその相違を見るためにも「死と死後の不安」についての内容はほぼそのまま用いたが、項目は日本人向けに表現は改変した。

また、「宗教心に関するもの」の尺度は、高木等の「宗教観尺度」²²⁾をもとに作成した。

なお、本分析において欠損値を含む個票は除外して処理した。

3. 結果及び考察

(1) 調査対象者の属性

各大学の性別、拡大家族経験の有無、身近な人の死に立会った経験の有無、入院経験の有無についての結果は表1に示した。

(2) 信仰する宗教

「何か特別に信仰している宗教はありますか」(複数回答)についての回答は表2に示した。本調査では無宗教と回答した学生は3大学合計で61%であった。

NHKの全国調査「日本人の宗教意識調査」²⁾によると16~19歳では67%、20代では77%が「信仰する宗教なし」と答えており、本調査結果と類似している。

そのため、調査対象の3大学とも様々な都道府県出身の学生で構成されているが、本研究では3大学の回答をあわせて統計処理した。

表3に信仰する宗教の有無またはその種類と家族形態との関係を示した。無宗教と答えた人では核家族、拡大家族経験者共に、ほぼ同数(143人、146人)であり家族形態との関係は見られなかった。他方、信仰する宗教があると回答した中で、もっとも回答の多かった仏教についてみると、拡大家族経験者が経験なしと答えた人の約2倍であった。このことから見ても、現在の日本では仏教は伝承される家族文化の一つであり、宗教心は学校で育まれる類のものではなく、家庭を土壌としていることが考えられる。

この点については日本人の場合、無宗教を自称していても初詣をする、おみくじを引く、お墓参りをするなどの宗教的行動、つまり信仰と結びついた慣習的行動をとっている²³⁾。このことから信仰心の有無に関わらず、宗教的慣習行動が「いのち教育」展開の導入としてもつ意味は大きいと考えられる。

表1. 属性、死の立会い経験、入院経験

対象者	n	性別		拡大家族経験		身近な人の死の立会い経験		入院経験	
		男	女	有	無	有	無	有	無
		人 (%) N=465							
A 大学	372	179 (48.1)	193 (51.9)	216 (58.1)	156 (41.9)	210 (56.5)	162 (43.5)	155 (41.7)	217 (58.3)
B 大学	48	20 (41.7)	28 (58.3)	18 (37.5)	30 (62.5)	23 (47.9)	25 (52.1)	17 (35.4)	31 (64.6)
C 大学	45	24 (53.3)	21 (46.7)	20 (44.4)	25 (55.6)	29 (64.4)	16 (35.6)	18 (40.0)	27 (60.0)
合計	465	223 (48.0)	242 (52.0)	254 (54.6)	211 (45.4)	262 (56.3)	203 (43.7)	190 (40.9)	275 (59.1)

表2. 信仰する宗教

大学	宗教							
	無宗教	仏教系	神道	キリスト教系	儒教	イスラム教系	道教	その他
A 大学	228	119	9	5	2	1	0	3
B 大学	38	9	0	1	0	0	1	0
C 大学	23	20	5	1	1	0	0	1
合計	289 (61.9)	148 (31.7)	14 (3.0)	7 (1.5)	3 (0.6)	1 (0.2)	1 (0.2)	4 (0.9)

表3. 拡大家族経験と宗教

人 (%) N=467

拡大家族経験	宗教							
	無宗教	仏教系	神道	キリスト教系	儒教	イスラム教系	道教	その他
有	143	97	8	4	1	0	1	2
無	146	51	6	4	2	1	0	2
合計	289 (61.9)	148 (31.7)	14 (3.0)	8 (1.7)	3 (0.6)	1 (0.2)	1 (0.2)	4 (0.9)

(3) 「死と死後の不安」項目についての因子分析

「死と死後の不安」に関する42項目について、主成分分析、Kaiserの正規化を伴うバリマックス回転による因子分析を行った。結果は表4に示す。固有値1以上、因子負荷量が±0.4以上の5因子が抽出され、5因子とも α 係数0.6以上であるため尺度として用いた。

因子名は第1因子“死後の自分の世界と肉体に対する不安”，第2因子は“死ぬ過程に対する不安”，第3因子は“身近な人の死に関する不安”，第4因子は“人生を未完に終えることへの不安”，第5因子は“死体に対して抱く不安”とした。

「死の不安」を測定する尺度としてはテンプラー(Templer, D.I.)による死の不安尺度(Death Anxiety Scale: 一般にDASと略称)²⁰⁾が世界的に用いられ、これまで膨大な研究が蓄積されている。しかし、DASの最大の欠陥として「死に対する不安は死を取り巻く信念体系の一部に過ぎず、それだけでは全体的な死の態度構造が把握できない」と指摘されている²⁵⁾。一方MFODSは「死の不安の多面性をこれまで以上に明らかにすることに成功した」²¹⁾と評価され、追試でも認められている。

このように評価されているMFODSを用いて調査を行ったが、今回の調査結果とMFODSの開発者であるホエルターの調査結果とは因子の現れ方が異なっていた。つまり、ホエルターの場合は8つの因子が抽出されていたが、本調査では安定した因子が5つしか現れなかった。また、ホエルターの因子に似た因子でも、まとまりの強さの順序が違うなど、因子の内容が異なっていた。

この理由は、MFODSの質問項目がキリスト教を基盤とする文化やアメリカの慣習を基準に作成されたものであり、日本人の生活になじみの薄い言葉や内容が存在するためと考えられる。たとえば、質問項目には「神など存在しないと思うと不安ですか」「創造主(神)の存在を知るのはこわいですか」「埋葬されるとした

ならば、自分の身体がいつの日かミイラになると思うとぞっとしますか」「生き埋めにされるのはこわいと思いますか」「埋葬されるとしたならば、死後、木製の箱で埋められようと、スチール製の埋葬室に入れられようと、別にかまわないですか」などである。

この両国間の相違は、生きることや死ぬことを扱う「いのち教育」を実践する場合、日本国内でも文化、感覚の相違ゆえに、授業者はその地域にあった内容の検討が求められることを示唆している。また、欧米の「デス・エデュケーション」の内容をそのまま翻訳的に引用し「いのち教育」として実践するには齟齬が感じられ、教育目的が達せられにくいという点が留意される。

(4) 「宗教観」と「死と死後の不安」5因子との関係

「宗教観」と「死と死後の不安」5因子の関係性を検討するため、有意差検定を行った。検定のために宗教観と因子について各々グループ化を行った。つまり、「死と死後の不安」5因子については、個人の因子得点をもとに、因子得点±0.40以上を高群(因子との関与が大きい群)、それ以下を低群(因子との関与が小さい群)にグループ化し、「宗教観」については5段階評定の粗点の分布や平均を考慮して30%以上を高群、30%以下を低群としてグループ化して有意差検定を行った。なお本研究において「宗教観が高い」という場合、心の支えとして宗教を肯定的に捉えたり、宗教を人との和や愛情と捉えたり、神仏の加護を信じたり、超自然的な存在を認めたりする度合いの強いことを意味する。

結果は各グループ間で有意差のあるものだけを示す(表5)。

「宗教観の低い」グループは「宗教観の高い」グループよりも、「死後の自分の世界と肉体に対する不安」が低い人が多く、「死体に対する不安」が高い人が多かった。前者の結果は、「宗教観の低い」人は死や死後の不安がなく心が平安ということではなく、宗教的

日本の大学生における死と死後の不安

表4. 「死と死後の不安」項目の因子分析結果（バリマックス回転後）

質 問 項 目	因 子					共通性	分散
	第一因子	第二因子	第三因子	第四因子	第五因子		
	死後の白 分の世界 と肉体に 対する不 安	死ぬ過程 に対する 不安	身近な人 の死に関 する不安	人生を未 完に終え ることへ の不安	死体に対 して抱く 不安		
	$\alpha=0.818$	$\alpha=0.817$	$\alpha=0.767$	$\alpha=0.792$	$\alpha=0.671$		
Q 25 創造主（神）の存在を知るのはこわいですか？	-0.700	0.004	0.035	-0.053	0.011	0.543	0.876
Q 46 神など存在しないと思うと不安ですか？	0.692	0.062	0.087	0.002	-0.142	0.526	0.933
Q 51 死んだら棺桶に閉じ込められると思うと、ぞっとしますか？	0.658	0.036	0.037	0.255	0.145	0.624	1.369
Q 27 埋葬されるとしたならば、自分の身体がいつの日かミイラになると思うとぞっとしますか？	0.610	0.117	0.014	0.099	0.172	0.492	1.697
Q 56 埋葬されるとしたならば、死後、あなたの身体が腐っていくことを考えるとぞっとしますか？	0.577	0.237	0.066	0.156	0.222	0.661	1.588
Q 21 死後の世界がないと思うとこわいですか？	0.568	0.051	0.039	0.324	-0.122	0.469	1.315
Q 36 あなたの死体が死後、発見されることを考えるとぞっとしますか？	0.562	0.100	0.163	0.110	0.183	0.479	1.453
Q 40 火葬にされることはいやだと思いますか？	0.546	-0.010	0.027	0.185	0.216	0.470	1.311
Q 45 死体安置室に横たわる間、自分の意識がまだ残っているかもしれないと考えたとぞっとしますか？	0.382	0.328	0.220	0.166	0.118	0.430	1.228
Q 44 埋葬されるとしたならば、木製の箱で埋められようと、スチール製の埋葬室に入れられようと、別に構わないと思いますか？	0.344	0.093	-0.002	0.030	0.136	0.245	1.336
Q 29 炎に焼かれて死ぬのはこわいと思いますか？	0.109	0.715	0.068	0.043	0.034	0.534	1.094
Q 38 死ぬときに、ものすごい痛みを経験するのはこわいですか？	-0.002	0.677	0.210	0.099	-0.024	0.582	0.726
Q 26 生き埋めにされるのはこわいと思いますか？	0.090	0.674	0.185	0.138	0.234	0.521	0.397
Q 47 窒息死（溺死も含めて）するのはこわいと思いますか？	0.012	0.672	0.276	0.076	0.057	0.571	0.540
Q 17 じわじわ死んでいくのは怖いと思いますか？	0.071	0.654	-0.008	0.134	0.201	0.520	1.140
Q 58 暴力によって死んでいくことはこわいと思いますか？	0.090	0.639	0.265	-0.018	0.062	0.520	0.548
Q 43 ガンで死ぬのはこわいですか？	0.275	0.458	0.197	0.229	0.257	0.497	1.207
Q 57 あなたの子どもたちが育っていくのを決して見られなしたら不安に思いますか？	0.181	0.329	0.264	0.269	0.124	0.394	0.907
Q 32 もし、自分ととても親しい人が突然死んでしまったら、当分の間、心が傷つくと思いますか？	0.004	0.199	0.682	0.147	0.063	0.560	0.228
Q 53 もしあなたが死んだら、友達は当分の間動揺するだろうと思いますか？	0.117	0.082	0.675	0.095	0.055	0.564	0.550
Q 41 死は誰にでも訪れるものなので、友達が死んでもそれほど動揺しないと思いますか？	0.029	0.216	0.665	0.112	0.141	0.548	0.410
Q 50 知り合いが死んだときは、動揺することがありますか？	0.093	0.177	0.660	0.081	0.152	0.539	0.334
Q 33 もし、あなたが明日死んでしまったら、家族はしばらくの間、動揺すると思いますか？	0.006	0.213	0.617	0.135	0.035	0.523	0.297
Q 42 夜中、一人で墓場を歩いたらこわいと思いますか？	0.280	0.256	0.369	-0.180	0.239	0.399	0.965
Q 37 したいことを全部経験する時間のないことを不安に思いますか？	0.227	0.108	0.164	0.745	0.128	0.666	1.376
Q 24 死ぬ前に、人生の目標を達成できないことが心配ですか？	0.156	0.155	0.096	0.735	0.081	0.624	1.233
Q 28 退職後の人生（余生）を楽しめるだけの十分な長生きができないとしたら不安に思いますか？	0.380	0.212	0.131	0.599	0.158	0.632	1.575
Q 34 死がすべての終わりであると思うとこわいですか？	0.447	0.196	0.211	0.507	0.106	0.572	1.811
Q 30 死体に触るのは平気ですか？	0.080	0.041	0.170	0.362	-0.095	0.645	1.153
Q 48 道路から動物の死体を取り除くのはとても苦痛ですか？	0.097	0.092	0.203	0.018	0.746	0.494	0.950
Q 55 死んでしまったものは、何でもこわいですか？	0.018	0.114	0.189	0.063	0.616	0.552	1.229
Q 39 死体を発見するのは、ぞっとする体験だと思いますか？	0.342	0.092	0.047	0.111	0.613	0.444	0.539
Q 18 葬式の家を訪問するのはいやですか？	0.038	0.242	0.361	0.036	0.465	-0.381	1.325
Q 31 医大の学生の演習として、死後、自分の身体を使われるのはいやだと思いますか？	-0.004	0.188	-0.063	0.198	0.442	0.635	1.161
Q 19 科学のために献体をしたいと思いますか？	0.127	0.175	0.136	-0.099	0.089	0.507	0.951
Q 49 あなたの死んだ後、眼球の寄付はしたくないと思いますか？	-0.068	0.109	0.064	-0.058	-0.098	0.511	1.486
Q 35 死亡を確定するために、誰もが検死解剖を受けるべきであると思いますか？	0.154	-0.017	0.104	0.082	0.130	0.535	0.891
Q 52 誰にも死後のことは絶対に分からないと思いますか？	0.113	-0.017	-0.024	-0.073	0.071	0.462	1.161
Q 54 死亡を宣告される際は、少なくとも二人以上の医者に検査（診断）してもらいたいですか？	-0.086	0.108	-0.021	0.156	0.247	0.399	1.298
Q 20 家族の誰かが死ぬのではないかと心配に思いますか？	0.201	0.316	0.145	0.097	-0.055	0.334	1.147
Q 22 本当はまだ生きていのに、死亡と宣告される人がおそらくたくさんいると思いますか？	0.148	-0.068	0.083	0.017	-0.163	0.545	0.999
Q 23 外見が醜くなって死ぬのはいやだと思いますか？	0.082	0.319	0.004	0.202	0.234	0.418	1.092

	第一因子	第二因子	第三因子	第四因子	第五因子
固有値	4.239	3.974	3.141	2.559	2.518
寄与率	10.093	9.462	7.493	6.093	5.995
累積寄与率	10.093	19.555	27.049	33.142	39.137

表5. 「宗教観」と「死と死後の不安」

因子	宗教観	
	宗教観 高い n=134 人	宗教観 低い n=134 人
死後の自分の世界と肉体に対する不安 (低)	23	< 51
死体に対する不安 (高)	31	< 54
死体に対する不安 (低)	47	> 30

表中の<, >は $p<0.01$ を, <, >は $p<0.05$ を示す.

関心が低いと、死や死後の世界について考える機会が少なく結果として不安度が低く示されたと考えられる。この点について、河野²⁶⁾は本調査と類似した結果から「死の不安には無関心が最も大きな影響を持ち、(中略)すなわち死に無関心なほど死の不安は弱い。したがって近代合理主義は総じて否定的な死観を持つが、死に無関心であることで死の不安を低めていると推察される」と述べている。また、金児²⁵⁾は「死の不安の低い人は、死の問題から逃避したり、あるいは人間の存在や生の意味を否定したりする人である。(中略)生を否定する「虚無」としての死観によって死の不安は低まっていたが、それは死の不安に対する防衛反応死観でもある」とまで言い切っている。

後者の「宗教観の低い」グループは「死体に対する不安」が高い人が多いという結果であるが、この結果は前者の裏返しでもある。つまり、実際存在するかどうか分からず、目に見えないまたは見ることのできない死後の世界や死後の自分の身体について考えることは「宗教観の低い」人にとっては無関心な出来事であるゆえに不安は低い、目に見える「死体」に対しては、不安は高まるのである。

なお本調査では「死や死後の不安」の高さゆえにその不安解決を求めて宗教的関心が高まったのかどうかを判断するデータを収集していないため、この点についてこれ以上の論及は控えておく。

死の恐怖と宗教についてバトソン (Batson) らの研究²⁷⁾では内発的宗教性は死の恐怖と高い負の相関(死の恐怖を軽減させる)が、外発的宗教性では低い正の相関(死の恐怖を軽減させない)が認められている。罰や集団からの逸脱、周囲の目を危惧するといった魂や精神を束縛する宗教心ではなく、自分の魂や霊性を解放する内発的な宗教観が重要であることが確認できる。このことは「いのち教育」の展開でも配慮を要する点である。つまり、「いのち教育」は人生の極

限である生きることや死について扱う内容であるので、脅しや恐怖を感じさせる展開であっては子どもたちの心は傷つき、心を閉ざしたり、表面的な反応を示したりすることになり、教育的効果が逆になるからである。

また、現代の日本では公教育はいうに及ばず、家庭や地域社会でも宗教観を育成する教育の機会が極めて少なくなっている。上記の本調査結果が示す意味は、「生きる力」や「命を大切に教育」²⁸⁾が重要な教育的課題となっている今日の学校教育において、宗教的な教育(宗教教育ではない)あるいは目に見えない世界やつながりについての観点から教育の再考を促すものと考えられる。

(5) 「性別」と「死と死後の不安」について

本調査結果では「死と死後の不安」5因子すべてについて女性が高い結果を示した(表6)。性差について、「先行研究で女性の方が男性よりも死の不安が強いことの解釈として、女性の方が男性よりも恐怖や不安を表明することを容認する文化的な背景がある」²⁶⁾ことが指摘されている。悲嘆を伴う死別経験の有無でも女子の方が高い結果が示されており¹⁸⁾、この背景にも同様な文化的背景が考えられる。

テンプラーのDASを用いた先行研究を見ると結果は様々であり、女性の方が男性より不安が高い²⁵⁾²⁹⁾、男女差は認められない²⁶⁾³⁰⁾³¹⁾の両方が報告されており、予断をゆるさぬ興味深い点である。

(6) 「拡大家族の生活経験の有無」と「死と死後の不安」について

拡大家族経験者の方が「死後の自分の世界と肉体に対する不安」「人生を未完に終えることへの不安」の2因子について高い結果を示した(表7)。これは、先の「宗教観」の高いグループで示された結果と類似しており、容易に考えられる結果である。高齢者を含む様々な世代の人と生活を共にしたり、死別経験を持つことにより、人生について考察が深まったり、死ん

日本の大学生における死と死後の不安

表6. 「性別」と「死と死後の不安」

因子	性別	
	男 n=223人	女 n=242人
死後の自分の世界と肉体に対する不安（高）	45	91
死後の自分の世界と肉体に対する不安（低）	78	48
死ぬ過程に対する不安（高）	50	75
死ぬ過程に対する不安（低）	89	65
身近な人の死に対する不安（高）	54	95
身近な人の死に対する不安（低）	94	57
人生を未完に終えることへの不安（高）	65	94
死体に対する不安（高）	55	83

◀, ▶は $p < 0.01$, <, >は $p < 0.05$.

表7. 「拡大家族の生活経験の有無」と「死と死後の不安」

因子	拡大家族経験の有無	
	拡大家族経験 あり n=254	拡大家族経験 なし n=211
死後の自分の世界と肉体に対する不安（高）	86	50
人生を未完に終えることへの不安（高）	101	58

◀, ▶は $p < 0.01$, <, >は $p < 0.05$.

だらどうなるのかという死後の世界への念が生じる機会が多くなったことの表れであろう。しかし、このような若者の不安を教育的に導く、現代の社会、家庭、公的教育環境の指導力や教育力が課題である。

(7) その他

「身近な人の死に立ち会った経験の有無」「入院経験の有無」と「死と死後の不安」との関連性については両項目とも有意差が見られなかった。

この結果については質問内容をもう一步深く踏み込むといった、項目の推敲不足が理由として考えられる。たとえば、前者については、家庭での死の立会いか、病院での死の立ち会いなのかが不明である。家庭であれば「死の看取り」経験がなされるが、病院死が80%を超える現代の日本では病院で死の立会いができた場合でも、それは最後の儀式的な立会いであり、その場で中心的に行動できる人は、年齢が上であり社会的に認められた親達であり、若者は脇役であり彼等にとっての「死の看取り」と死にいく人との交流は行われにくい。

後者についても、単に「入院経験の有無」を問うの

ではなく、「生命の危機に直面するような入院経験の有無」を問う質問内容の設定が要求される。現代のわが国では医療費増大が国家的財政問題になっているとはいえ、医療保険制度の整っているわが国では、WHOの2000年レポートによると、医療制度を総合評価したランキングで世界1位になっており³²⁾、病院は利用しやすく重病でなくても大事をとって入院することも多々ある。入院が休養となったり、逆に退屈な生活となったりする現実では、入院することが人生を省みたり、生きること、死ぬことを考える機会につながるとは限らないからである。

以上のことから、この2項目については今後質問内容の再検討が必要と考えられる。

4. 要約

「いのち教育」を展開するための基礎的知見を得るために、大学生を対象に「死の不安に関する多次元的尺度(MFODS)」を用いて、「死と死後の不安」についての意識調査を行い、結果として以下のことが得られた。

(1) 因子分析では「死と死後の不安」について5因子抽出された。この因子分析結果は、因子数や因子の内容共に、MFODSが開発されたアメリカでの調査及び追試の結果とは異なった。原因としては、宗教や文化的慣習の相違が挙げられる。この相違は「いのち教育」を実践する場合、宗教や慣習を考慮した展開が重要であることを示している。

(2) 信仰している宗教の有無については、本調査でも約60%の学生が無宗教と回答していた。「いのち教育」は宗教や慣習行事と深い関係があり、実践に際しては宗教や慣習は考慮する必要がある。日本の場合、無宗教と信仰心がないこととは別のことであり、初詣をする、おみくじを引く、お墓参りをするなどの宗教的慣習行動をとっている。このことは「いのち教育」展開の導入として、意味は大きい。

(3) 「宗教観の低い」学生は「死後の自分の世界と肉体に対する不安」因子が低く、「死体に対する不安」因子が高かった。「宗教観が低い」学生は目に見えない世界やことについて価値を置かない結果と考えられる。

(4) 性別と「死と死後の不安」の関係では、女子学生が男子学生に比べてすべての5因子で高い結果を示した。これは歴史的・文化的背景を含んだジェンダーバイアスとも考えられる。男子学生には「死と死後の不安」が少ないことではなく、むしろ男子学生には無意識的に表現が抑圧されているだけに精神的ストレスが大きいことが考えられる。

(5) 抽出された「死と死後の不安」5因子は、「いのち教育」を展開する際の内容の提示と考えられる。今後「死と死後の不安」5因子を「いのち教育」の授業内容として具体的に展開する研究や実践がなされることが期待される。

引用文献

- 吹山八重子, 得丸定子: 葬送儀礼・慣習に見られる「いのち教育」—昭和初期から高度経済成長以前における葬送儀礼の意義—, 家教誌, **46** (4), 340-350 (2004)
- NHK 放送文化研究所: 第7回「日本人の意識・2003」調査, 46-47 (2003)
- 湯浅泰雄, 春木 豊, 田中朱美 (監修): 『科学とスピリチュアリティの時代』, ビイグ・ネット・プレス, 東京 (2005)
- 池上良正, 小田淑子, 島蘭 進, 末木文貴士, 関 一敏, 鶴岡賀雄 (編): 『岩波講座宗教 10 宗教のゆくえ』, 岩波書店, 東京 (2004)
- 島蘭 進: 『精神世界のゆくえ 現代世界と新霊性運動』, 東京堂出版, 東京 (1996)
- 島蘭 進: 『ポストモダンの新宗教 現代日本の精神状況の底流』, 東京堂出版, 東京 (2001)
- 伊藤雅之, 櫻尾直樹, 弓山達也 (編): 『スピリチュアリティの社会学』, 世界思想社, 京都 (2004)
- 大下大圓: 『癒し癒されるスピリチュアルケア』, 医学書院, 東京 (2005)
- カール・ベッカー (編): 『生と死のケアを考える』, 法蔵館, 京都, 17-44 (2000)
- 近藤 卓: 『いのちを学ぶ・いのちを教える』, 大修館書店, 東京 (2002)
- 種村エイ子: 『「死」を学ぶ子どもたち』, 教育史料出版会, 東京 (1998)
- 金森俊朗, 村井淳志: 『性の授業 死の授業』, 教育史料出版会, 東京 (1996)
- 「学校における生命倫理教育ネットワーク」(編): 『生命の教育』, 清水書院, 東京 (2000)
- 熊田 亘: 『高校生と学ぶ死—「死の授業」の一年間—』, 清水書院, 東京 (1998)
- 鈴木康明: 『生と死から学ぶ』, 北大路書房, 東京 (1999)
- 得丸定子, 北原利枝, 石塚智子, 田宮 仁: 「生と死の教育のための教材開発—小学校高学年向け教材—」, 家政誌, **50** (11), 1189-1196 (1999)
- 有村久春 (編): 『教職研修総合特集 No. 166 「命を大切に教育」をどう進めるか』, 教育開発研究所, 東京 (2005)
- 得丸定子, 吹山八重子: 悲嘆を伴う死別に関する意識調査—小・中・高等学校の児童・生徒を対象として—, 家教誌, **47** (4), 358-367 (2005)
- Hoelter, J. W.: Multidimensional Treatment of Fear of Death, *J. Consulting and Clinical Psychology*, **47**, 996-999 (1979)
- Walkey, F. H.: The Multidimensional Fear of Death Scale: An Independent Analysis, *J. Consulting and Clinical Psychology*, **50**, 466-467 (1982)
- カール・ベッカー (編): 『生と死のケアを考える』, 法蔵館, 京都, 170 (2000)
- 堀 洋道, 山本真理子, 松井 豊 (編): 『心理尺度ファイル 人間と社会を測る』, 垣内出版, 東京, 422-427 (2000)
- 小野寺典子: 日本人の宗教意識, 放送研究と調査 5月号, 52-67 (1999)
- Templer, D. I.: The Construction and Validation of Death Anxiety Scale, *J. General Psychology*, **82**, 165-177 (1970)
- 金児晚嗣: 大学生とその両親の死の不安と死観, 大阪市立大学文学部紀要, **46** (10), 537-564 (1994)
- 河野由美: 大学生の宗教観と死観及び死の不安に関する計量的研究, 飯田女子短期大学紀要, **17**, 73-87 (2000)
- Batson, C.D., Schoenrade, P., and Ventis, W.L.: *Religion and the Individual*, Oxford University Press,

日本の大学生における死と死後の不安

- New York (1993)
- 28) 文部科学省：『児童生徒の問題行動対策重点プログラム（最終まとめ）』 http://www.mext.go.jp/h_menu/houdou/shotou.htm (2004)
- 29) Feifel, H. (ed.): *The Meaning of Death*, New York, McGraw-Hill (1959)
- 30) 木村正治, 広海義介：大学生の死の不安に影響を及ぼす因子について, 熊大教育実践研究, **7**, 1-8 (1990)
- 31) 松田信樹：青年の死の不安を規定する要因についての検討—性差, 死別経験, 時間的展望の観点から—, 人間科学研究, **4** (1), 57-65 (1996)
- 32) 朝日新聞, 9月25日, 12版 (2005)